
全ては国のため

鷹売りのタカさん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

全ては国のため

【Nコード】

N9683Y

【作者名】

鷹売りのタカさん

【あらすじ】

これは、紀元前からこの国を守り続けてきた一族と、たまたまその一族の代々使用人長兼親衛隊隊長をつとめてきた一族に転生した高校生の物語である。

プロローグ〜日本〜（前書き）

はじめまして、鷹売りのタカさんです。

この物語では主人公が無双する予定です。

そういったものが好きな方も好きでない方も

暇つぶし程度に見ていただけたらうれしいです。

プロローグ〜日本〜

「おぎゃあああああ！おぎゃあああああ！」

ここは日本のとある武家屋敷。そこで、新たなる命が産声を上げていた。

「当主！お産まりました！」

屋敷の一室に、男の低く大きな声が響く。その視線の先には、細身で薄く髭を生やした男が腰に一振りの刀を携え、悠然と佇んでいた。

「おお、ついに産まれたか……。案内しろ」

「はっ、こちらです」

男は、当主と呼ばれた男を連れ、その部屋を後にした。

長い廊下の奥にある部屋から赤子の泣き声が聞こえる。男は、当主と呼ばれた男と共にその部屋の中に入っていった。

部屋の中には長く綺麗な黒髪が目立つ、大和撫子よ呼ぶに相応そうな女性と、その周りを忙しそうに駆け回る使用人の姿があった。女性の顔からは出産による疲労が感じられた。そして、その女性の胸に赤子が一人抱かれていた。

「奥方様。当主をお連れいたしました」

「^マ苦勞様」

奥方様と呼ばれた女性は、男に労いの言葉をかけると先ほどの当主と呼ばれた男の方を向いて言った。

「御國（みくに）さん、赤ちゃんです。私とあなたの子供ですよ。」

「ああ、よくやった椿姫（つばき）、でかしたぞ。さてそれでは早速・・・」

そう言うと、御國は腰に携えた刀を抜き、未だに泣き止まぬ赤子に刀の柄を握らせた。すると今まで泣き止まなかった赤子が段々とおとなしくなっていく、1分後には笑顔になっていた。

「ふふ、流石は御國さんの子供ですね」

「うむ、私も産まれたときは全然泣き止まなくて使用人一同困っていたが、父上が今と同じようにこの『日ノ本』を握らせると、瞬く間に泣き止んだそうだ。父上の話によれば私だけでなく、我が『日本（ひのもと）』の家系の者は皆、この方法で泣き止んだらしい。この子も立派な守護者の血を引いているということだろう」

「ええ、この子もあなたのように、最強の名に恥じぬ強さを秘めていると思います」

「うむ」

そう言うのと御國は立ち上がり、先程から後ろで待機していた男の方を向いて言った。

「暁文（あきふみ）、宴の準備をしろ。我が子の誕生だ。盛大に祝うぞ」

「その前に当主、大事なことを忘れています」

「む？何かあったか？」

「ふふ、名前ですよ。御國さん」

椿姫の一言で、御國は「あっ！」と大きな声を上げて、天を仰ぎ叫んだ。

「不覚！この『日本御國』、人生で最大の失態だ！」

「反省は後にしてください。それより早くこの子に名前を」

「おっと、そうだった。男の子だからなあ、強そうな名前にしてやりたいな」

御國は頭を抱えながら呻いた。そのまましばらくすると、突然笑顔になり言った。

「決めた！この子の名前は『帝（みかど）』だ！」

『日本帝』だ！」

今宵、建国以来、歴史の裏でずっとこの国を守り続けてきた最強の家系に、新たな名前が刻まれた。

プロローグく平行世界く(前書き)

二話目です。

なるべく早く更新していこうと思います。

プロローグ／平行世界／

日本家で、新たな命の誕生が祝われているころ、別の平行世界では一つの命が終わりを迎えようとしていた。

＊

多くの人が歩いている広い歩道の中に、やたら足取りの軽い青年がいた。お世辞にも顔はいいとは言えず、中肉中背で眼鏡をかけたその青年が顔をだらしなくにやつかせている。そしてその手には、紺色のビニール袋が握られていた。

「ふふふ、ふははははは、ついに手に入れたぞ！なのはのゲームを！このときをどれほど待ったか……。俺がなのはに出会ってからのこれまでの道程は険しいものだった、がしかしすべてはこの時のためにあったとも言えよう。どれ、もう一度あの神々しいオーラを放つパッケージを拝見しようか」

そう言う青年からは酷く禍々しい狂気に似た気配が放たれていて、周囲の人々はドン引きだった。

青年は紺色のビニール袋からゲームのパッケージを取り出した。

そのパッケージには『魔法少女リリカルなのは A's』と描かれていて、数人の男女がコスプレのような服を着て、各々ポーズを決めていた。

一般的に見ればオタクと呼ばれるような方々が所持しているであろう物を、多くの人々が闊歩する天下の往来で、顔をにやつかせながらまじまじと見つめていれば、その後どうなるかは予想がつくだろう。

10秒もしないうちに、その青年の半径1メートル圏内に近づくものはいなくなった。

「ふん、所詮は否定するしか脳のない衆愚か。受け入れるところが世界平和に繋がる大いなる一歩だとなぜ気づかない。他人のやりかたに口出しする気はないが、個人の趣味を否定するのは無礼であり、一種の精神攻撃だ。嘆かわしい……。まあ、アニメやラノベに好き嫌い言ってる俺が言ったところで、説得力など微塵もないがな、ふひひ」

そんなことをブツブツと呟いているうちに、小さな横断歩道に着いた。

「さあ、家までの距離はもう目と鼻の先。戦う準備はできている。隣の公園で子供が無邪気に戯れているな。頼むから飛び出しなんて

まねはするなよ。二次創作なんかじゃここで子供が飛び出してそれを助けた俺オワタ、なんて展開がありきたりなんだから。でも待てよ、それで俺が死んで二次創作よろしく神なる存在が出てきてなのは世界にでも転生できたとしたら、それはとても素晴らしいことなのではないか？ 最高に俺得な世界がそこにはあるんじゃないか？ 原作キャラとキャツキャウふふできたらと思うと桃色な妄想が我が脳を駆け巡るぞ！・・・まあ、実際にそんなことがあるはずがないがな。俺はこの後無事家に着き、なのはのゲームを誰にも邪魔されずにプレイする。子供たちは戯れ、夕刻に母親の呼ぶ声を合図に各々帰路に着く。信号待ちの車は交通ルールを守り、何のトラブルもなくそれぞれの目的地にたどり着く。その何が不満だって言うのさ。俺も無事、子供たちも無事、それでいいじゃない。俺のため、君たちのためにも、そこで無邪気に戯れていたまへ、チミッ子たちよ」

そして信号が赤から青に変わる。青年は、よりいっそう顔をにやつかせ、待ち受けるであろう栄光へのスタートラインを切った。

そこにゴールラインは存在しないことを知らずに・・・。

青年が一步踏み出したと同時に道路に転がるボール。
それを取ろうと道路に飛び出した少年。

歩行者の信号が青に変わっているにも関わらず突っ込んできた大型車。

「ふざけるなよクソがああああああッッッッッ！！！！！！」

まさか自身の理想が一つも叶わずに水泡に帰す様は拍手すら送りがたくなる。現実と反対の出来事を予知する能力が備わっているのではないかと思うほどだ。そんなことを考えると同時に青年は、子供を救うため、自身も道路に飛び出した。

勘違いしてはいけない、青年はちっぽけな正義感で飛び出したのではないということ。親を泣かせ、兄弟を泣かせ、その涙すらどこ吹く風と無視し続け、怠惰な日々を送ってきた青年。将来に希望があり、無邪気に公園で同年代の子達と腕白に駆け回る少年。

「どっちが社会的に得かを考えたら、無論後者だろうがああああ！！！！！！」

青年は我が身可愛さに将来有望な若い命が散るのを眺めているほど堕ちてはいない。損得勘定はわきまえた上で出した結論である。

青年は全速力で少年に近づき、全力で突き飛ばし、歩道へと戻した。青年の目の前には既に死が迫っていた。

（最後に何か一言言いたいなあ。せっかくの駄目生活にこんなにかっこいい形で終止符が打たれるなんて俺の主義に反する。駄目人間に相応しい一言を残し、潔く今生の別れを告げようではないか）

「なのは最高！二次元最高！ニート万歳！No job, No
gu——っぐはぁ！」

言わせろよ。

*

ちっぽけな未練を残して、一つの命は終わりを迎えた。

プロローグ／平行世界／ 後編（前書き）

前回の続きになります。

プロローグ／平行世界／ 後編

目が覚めるとそこは真っ白な空間だった。横には白、後ろも白、下にも白、上にも白、前に白髭のおじいさん、とにかく自分の周囲の全てが白色だった。

「なんだここは・・・、あたり一面真っ白って・・・、頭がおかしくなりそうな場所だ。いったいどこだここは・・・なんて王道な台詞を吐くと思ったら大間違いさあ！自分が死んだって事くらい理解できてるよ！今だって鮮明にあの時の状況を思い出せるね。ボールを拾おうとしたチミッ子が道路に飛び出したと思ったら信号無視した車がドーンって来てバーンってなってアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！思い出すだけでも反吐がでるよあの車ア！なんだよ！最後の一言ぐらい全部言わせろよ！おかげで綺麗にあさるばできるはずだった現世に中途半端な未練残しちゃったってアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！！！ゲームやってねええええええええええ！！！！ふざけるなよあの車ア！！！！1つだけでなく2つも未練残したまま死んじゃったじゃねえかああああああああああああ！！！！！！！！！！」

「あの何か知らんけど、落ち着いてもらえんか？」

現世に残した恨みの全てを吐き出していると、目の前には長い白髭と埃一つない真っ白なローブが目立つおじいさんがいた。

「なんだいおじいさん。何時からそこにいたんだい？まあ、とにかく今の俺に近寄っちゃいけないよ。今この恨みの捌け口を探している最中だからね。そんなところにいたら運悪くお釈迦様になっちゃうかもしれないよ？」

「まあ、既にお釈迦様みたいなもんです、と言えばそれまでなんじやがな……。それに最初からここにいたよ。てか君、一度ワシの方見たよね」

「おいおいおじいさん。馬鹿なこと言っちゃいけないよ。既に死んでるなんて言わないでくれよ。縁起が悪いじゃないか。あんたにだって孫とかいるだろ？こんなところで俺の恨みの捌け口になって死ぬんじゃないくて、自分の息子とか孫に看取ってもらって死ぬべきって、俺も既に死んでるじゃねえかあああああああああ！！！！！！」

「あの車畜生！！どこだ！！どこにいやがる！！この恨み晴らさしておくべきかあ！！！！！！」

「」

「静まれい！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」

再度俺が恨みを吐き出していると、おじいさんにとんでもない声で止められた。そのおかげで俺の鼓膜が崩壊しそうになった。

「おうふ……耳が……ミミガー……」

「落ち着いたか？」

「あ、ああ、落ち着くどころか永眠するところだったよ」

「既に永眠しておるわ。さて、落ち着いたところで本題に入ろうか。まずこの場所についてじゃが、説明が必要か？」

「否、あんたの言動とかから大体察しはついている。俗に言う死後の世界とかいうやつだろ？」

「死後の世界とはちょっと違うが似たような物じゃ。とにかく、そこまで分かっているなら話が早い。お主、転生というものを知っておるか？」

「無論、二次創作なんかじゃ王道的なものだからな」

「うむ、ではお主、転生する気はないか？」

「この会話の流れ的にその質問が来ることは予想していた、がしかしその質問に答える前に聞きたいことがある。何故そんな話を俺に持ちかける？」

「どうということじゃ？」

「二次創作なんかじゃ転生の話を持ちかけるのは神、もしくはそれに近い何かだ。そして転生させようとする理由の1つとして有名なのが、神側のミスで主人公が死に、その罪滅ぼしに転生させるというものだ」

おじいさんは長い白髭を弄りながら首を傾げた。

「確かにワシは一般的に神と呼ばれる存在じゃ。しかし話がよく掴めんのじゃが……」

「つまりだ……あんなが俺を間接的に殺したヤツかって聞いてんだよおおお!!!!!!」

そう言う神は、バツが悪そうに俯いた。

「む……そのとおりじゃ。此度のお主んお主の死はこちら側のミスによるものじゃ。すまなかった」

そう言う神は、地面に頭を叩きつける勢いで土下座した。

「なっ・・・おいおい待てよ。そこまでする事はないぜ。俺は真実が知りたかっただけだ、あんたに恨みはないよ。恨みがあるのはあくまであの車さ。それに神とは言え、見た目お年寄りにこんな土下座させてる俺ってすごい悪いヤツみたいじゃないか。頭を上げておくれよ。それとさっきの転生の話についてだが、返事はOKだ」

「む、何故じゃ？」

「転生なんて俺からすれば願ってもないことだ。死んで終わりだと思ってたが、人生も中々捨てた物じゃないな。ところで転生とは、そのまま俺が生きていた世界に生まれ変わるのか？」

「それはどちらでも構わんど。お望みとあらばお主の好きなゲームやアニメの世界に生まれ変わる事だって可能じゃ。何か希望があるのか？」

「無論、『魔法少女リリカルなのは』の世界を希望する。ちなみに神から何か能力をもらえるというのは、実際のところあるのか？」

「然り、本来ならありえんのじゃが、君の場合はワシのミスが原因じゃ。罪滅ぼしと言っては何じゃが、なんでも言ってくれ。大体のことは叶えてしんぜよう」

「では、容姿の改善を要求する。具体的には、銀髪、黒と赤のオツ

ドアイ、身体能力チート、魔力チート、これだけあれば十分だ」

「銀髪に黒と赤の目とは、バランスが悪くないかの？」

「いいんだよ、できるか？」

「当たり前じゃ」

そう言って神は俺に向けて手をかざした。すると、俺の中からとてもない力が溢れてくるのを感じた。神が俺に鏡を渡してきたので、それを受け取り見てみた。鏡には銀髪で黒と赤のオッドアイを持ったイケメンが映っていた。

「なんと！？これが俺か！素晴らしい。ありがとう神よ」

「満足したかの？生まれ変わるのじゃから、その容姿にたどり着くのは随分先になるがの」

「問題ない。ちなみに原作キャラと同じ年になるように時期を合わせてくれ」

「よかろう。では始めるぞ。達者でな」

その一言を聞いた瞬間、突如浮遊感が俺を襲った。

「へえ、本当にこうやって送り出されるのか。貴重な体験をした」

その一言を最後に、俺は意識を失った。

＊

「・・・・・・・・行ったか」

真っ白な空間の中、神は呟いた。

「中々面白い若造じゃったが、自身の憧れのキャラクターを前に、己が欲望を抑えていられるかの。まあ、送った先があの一族のいるところじゃ。数年後にはとんでもなく真面目なヤツになってるかもしれない。いやしかし、ちょうど子宝に恵まれなかったと嘆いておったからな、良いことをした気分じゃ」

真っ白な空間には、神の独り言が響いていた。

＊

（暗い・・・・・・・・どこだここは・・・・・・・・酷く窮屈だ・・・・・・・・
確か俺は・・・・・・・・神に、なのはの世界に送られて・・・・・・・・ん？光？
ちようどいい、あそこから出られそうだ・・・・・・・・）

一刻も速く、この窮屈な場所から出たいと思い、目の前の光を求めて手を動かそうとした。しかし思うように動かず焦っていると、自然と押し出される感じがした。その瞬間、喉に違和感を感じ、あまりにも不快だったため全力で叫んだ。

「おぎゃあああああああ！」

「う、産まれた！ 産まれましたよ、当主！」

「ああ、よかったな、暁文」

「ああ、子宝に恵まれず妻共々諦めていたが、神が私たちに恵みをくださった」

「よせよ暁文。そんな柄じゃないだろ」

そんな声が聞こえて目を開けると、俺を抱いて優しそうに微笑んでいる女性と、泣いて跪いている先ほど暁文と呼ばれていた男と、腰に刀を携えた当主と呼ばれていた男と、その男の隣に6、7才くらいの男の子がいた。当主と呼ばれていた男が、自身の隣にいる男の子に言った。

「ほら帝、これから長い間一緒に過ごす事になるんだ。挨拶しなさい」

「はい、父上」

そして帝と呼ばれた男の子が、ゆっくりと俺の方に歩いてきて、俺の顔を覗き込みながら言った。

「はじめまして、僕は帝、日本帝だよ。これからよろしく。」

『流（ながれ）』

これが、俺こと『大和流』と『日本帝』のファーストコンタクトであつた。

プロローグ／平行世界／ 後編（後書き）

やっとプロローグを終えました。

しばらくは原作キャラは出ません。

早いうちに出そうとは思っています。

一話（前書き）

先に言っておきます。

主人公は帝です。

あくまで流はサブです。

でも流視点で話を進めることは多いです。

一話

拝啓 前世の両親、兄弟、そして名も知らぬ同胞たち

俺は無事、『魔法少女リリカルなのは』の世界に転生することができました。

何故なら俺が今住んでいるところが、海鳴市から少し離れた所にある山の上の武家屋敷だからです。

この世界での父と母はとてもいい人です。

時に厳しく、時に優しくと言った素晴らしい方々です。

さて、重要なのはここからです。

これからこの世界に転生するであろう方々への警告でもあります。

俺の両親が使用人長、父に関しては親衛隊隊長としても仕えている方々は・・・

チートです。

＊

俺が生まれてから七ヶ月が過ぎたころ、両親が日本家の現当主である日本御國さんと、その息子である日本帝君の修行を見学させようと言い出しました。まだまだ赤子である自分に修行風景を見せたところで理解はできないかもしれませんが、印象には残るだろうと言うことです。いずれは俺も習うものらしいので、正しいイメージを幼い内から植えつけておこうと言うことでした。既にお二方は中庭

で修行の準備を終えたということなので、両親は俺を連れて中庭へと向かいました。

「さて、今日の修行は見学者が1人いる。今日の目的の1つとして、お前に長い間仕えることになる流君に我が一族の流派、『日本流武術』の正しいイメージを頭に植えつけるというものがある。これは後の日本家のため、大和家のため、流君の成長のため、何よりお前のためでもあるからな、気合入れろよ、帝」

「はい、父上」

帝は短く返事を返すと、たくさんの丸太が円状に立ててある中の中心に立ち、腰を低くして、抜刀の構えを取った。

「よし、ではまず準備運動だ。『刀閃圈』を丸太を全て斬ることができる分だけ広げ『陽炎』で全て斬れ」

「はい、父上」

それから帝は先ほどの抜刀の構えを崩さぬまま、目を瞑った。その状態で三秒ほどいると、帝はいきなり目を開き

「『陽炎』」

とたった一言呟いた。丸太に変化もなく、帝が動いた様子もない。思わず俺は首を傾げてしまった。しかし御國さんが丸太に近寄りノックをするように丸太を小突いた瞬間――――

全ての丸太がさらさらと粉になって風に吹かれて飛んでいってしまった。

俺は思わず自分の目を疑った。丸太に何かしたようにも見えず、目に見えて分かることといえば帝が一言呟いただけだったからだ。

「流石だな。6才でここまで斬ることができるとは……。俺でも6才じゃ木片にするまでしかできなかったぞ」

「……斬ったのかよ。全然見えなかった。御國さんや父はとうやら見えていたようで、帝の腕前に感心していた。いやいやおか

しくね？6才だぜ？ましてや俺は身体能力チートだぜ？その俺が見えないってどういうことだよ。神のヤツ、さては嘘をついたな。チート能力を正しく受け取っていれば見えているはずだ。なぜなら俺は最強なのだから。

なんて幻想は三年で打ち破られた。

3才の俺の身体能力は大人もびっくりなものだった。50メートル走るのに5秒もかからなかった。ベンチプレスで世界記録を破るのは非常に容易だった。

・・・・・・チートだな。

俺は思った。どこの世界に3才で世界記録を破るヤツがいようか。これをチートと言わずして何と言う。そして、これほどの偉業を成し遂げた時の父の言葉ほど驚愕したものはない。

「すごいな、流。まるで当主や帝様みたいだよ」

このとき俺は悟った。俺がおかしいのではなく彼奴等がおかしいのだと。神が与えたチートを上回るチートな一族がなのは世界にあったなんて……。全転生者諸君に言おう、高町士郎氏や恭也氏に勝てたとしても喜ぶのは早いぞ。勝負の世界には常に上には上がいる。心しておけ。

「流、修行の時間だよ。父上の所に行こう」

「あ、はい、今行きます帝様」

＊

僕には弟みたいなヤツがいる。名前は流と言って、僕が6才のときに当家の使用人長である大和夫妻にできた子だ。僕が言えた事ではないが、この子は1才の時から力が強く、僕も父上も暁文もびっくりしたほどだ。日本家にもっとも近い家系でもある大和家の人間は、産まれたときから一般人よりも卓越した身体能力を有しているのは周知の事実である。しかしそれは決して日本の人間には及ばなかったが、流は大和の中でも特に身体能力が高い。それでも日本には及ばなかったがこれは異例である。何より流には日本家、大和家

の両家の人間が代々持っている漆黒の髪と瞳がない。一般的な家系ではさほど気にすることではないが、我々にとっては大問題である。一時期由緒ある家系に異邦人の血を入れたのかと騒ぎになりかけたほどだ。しかし僕はそれは違うと思った。何かは分らないが、流の髪や瞳、そして身体能力に違和感を感じるのだ。あれが本当の流ではないように。まるで誰かがあの容姿と能力を与えたみたいに・・・。馬鹿馬鹿しい、たとえなんであれ、あれが流であることに変わりはない。もし彼が僕に何か隠し事をしているのなら、いつか話してくれる日が来るのを待っただけだ。とりあえず今は雑念は捨て、修行に集中しなければ。

「流、修行の時間だよ。父上の所に行こう」

一話（後書き）

今回は固有名詞を多く出したので、近々設定を出そうと思っています。

次こそは原作キャラを出せるようにがんばります。

ご意見、ご感想等がございましたらどうぞよろしくお願いします。

設定く日本家く（前書き）

主人公達のことじゃなくて、主人公達の家についてです。

設定／日本家／

【日本（ひのもと）家】

紀元前から、日本を守り続けてきた一族。何代続いているかは当の本人達も覚えていない。

代々卓越した身体能力を有しており、水の上を走ったり、電車と同じかそれ以上の速さで走ることもでき、自由の女神くらいの大きさの物を殴って破壊したり、地面からはずして振り回すこともできる。気や魔力などは一切宿していない。

日本の血統の者が基本的に当主となり、その際に初代から受け継がれている刀、『日ノ本』を託される。刃こぼれしない、錆びない、折れない、曲がらない、そして何でも斬れるというふざけたスペックの刀であるが、普通の刀に比べて非常に重いため、一般人では持つことすら叶わない。当主となった日本の血統の者は、常にこの刀を持ち歩かなければならない。

日本家というのはその一族を指す言葉でもあり、1つの組織としてのの名称でもある。実際に日本の血を引いている者は数人で、それ以外のほとんどは普通の人間である。

知名度は低く、各国の主要人物、もしくは高名な武家の人間、もしくは裏の世界でも屈指の実力者達が、その強さと危険性を熟知して

いる。ちなみに高町士郎、恭也は日本家の存在自体は知っているが、海鳴市の近くに拠点があるということは知らない。時空管理局では、地球出身でそれなりに地位が高い者（ギル・グレアムなど）、最高評議会だけが、その存在を知っている。

基本的に表舞台には出てこず、テロリストが日本に密入国しテロを起こそうとする、または異世界から次元犯罪者が逃げ込んできて、それが日本に害を及ぼそうとするなど、日本の成長において不要な存在、もしくは未知の技術や能力を使い、国に混乱をもたらそうとする存在を秘密裏に処断する。今までの戦争や犯罪に介入しなかったのは、日本の成長において必要と判断したか、原因の一端に日本が関わっていたというのが理由である。

海鳴市から少し離れた所にある山の上に建てた武家屋敷が拠点である。屋敷には総勢114もの人間が寝泊りしており、その全員が無類の強さを誇っている―（ただし、日本の血統の者には劣る）。中には改心して、日本のために尽力を尽くしている次元犯罪者もいる。無論、魔導師もいる。

表向きには、山にでかい屋敷を構えているヤクザとして知られており、そういう意味では知名度は高い。ヤクザと言っても、ボランティア活動に積極的に参加したり、地域の活動にもよく顔を出しているため、人々に嫌な印象は持たれていない。

中には見習いの子供も多く、各々が修行に励んでいる。ちなみに全員学校にも通っており、日本家のことは知られないようにしている。

日本家の血統の一族達が表舞台に出るときは名前を『日野』と名乗っている。ちなみヤクザとして活動するときには『日野一家』と名乗っている。

全員が日本至上主義であり、座右の銘は『お国のためなら親だつて斬る』である。日本が終わるときは自分達の終わるときでもあると考えている。

【大和家】

日本家に代々使用人長兼親衛隊隊長兼付き人として仕えている一族である。日本の血統と同じくらい長く続いている一族であり、日本家と同じく何代続いているかは当の本人達も覚えていない。

代々卓越した身体能力を有しているが、日本の血統には及ばない。しかしそれでも一般人からすれば化物同然である。

大和家自体は全く以って無名だが、日本家にはもう1つやバイ奴等がいると言う風に知られている。

武術の修行のほかに、使用人としての修行などもやっており、単純な労力だけなら日本家随一である。

大和家自体は無名なため、学校などの場所では、普通に大和と名乗っている。しかしヤクザとして活動するときは『日野一家』と名乗っている。

【日ノ本】

初代から日本の血統の者に受け継がれている刀。製法や使われている金属は謎で、二度と作ることとはできないと言われている。

日本の血統の者が当主となる際に受け継がれる刀で、当主になってからは、この刀を常に持ち歩かなければならない。

刃こぼれしない、錆びない、折れない、曲がらない、そして何でも斬れるというふざけたスペックの刀であるが、普通の刀に比べて非常に重いため、一般人では持つことすら叶わない。魔導師との実験の結果、魔法も斬ることができると判明している。

【構成】

当主

親衛隊隊長

直属親衛隊

軍団長

日本（ひのもと）軍

見習い

使用人長

使用人

総勢114人

設定く日本家く（後書き）

次は主人公達の技についてです。

設定く日本流武術く（前書き）

主人公達の技についてです。

設定／日本流武術／

【日本流武術】

『日本流剣術』、『日本流拳術』、『日本流堅術』の三つで構成されており『三けん術』と呼ばれている。

【日本流剣術】

日本家の人間のほとんどが使っているもので、距離が存在しない剣術と言われている。

・技

『刀閃圈』

自分の感覚を広げる技。

圈内にある物質や生物を感知することができる。HUNTER×HUNTERの円とほとんど一緒だが、気や魔力やオーラを展開するのではなく、感覚を広げるだけなので、同じく刀閃圈が使える者以外は圈内にすることが理解できない。感覚が鋭い者、気配に敏感な者なら、誰かに見られてる程度に感じる。優れたものは一瞬で何キロメートルも広げることができる。地上で使えばドーム状になり、空中で使えば球状になる。

『陽炎』

自分の周囲を一瞬で何千何万と斬る抜刀術。

優れたものは一瞬で粉になるまで斬ることができる。この技の射程距離は、自分が展開できる刀閃圏の範囲に比例しており、半径1キロメートルの刀閃圏を展開すれば、1キロメートル分の圏内全てを斬ることができる。しかし広げれば広げるほど、斬る回数は減る。逆に狭めれば狭めるほど多く斬ることができる。刀閃圏を展開した上でこの技を使うことで、狙いが正確になり、圏内にあるものを選んで斬ることができる。一人前になれば、刀閃圏の展開から陽炎まで手順を0，1秒で行うことができる。回避不可能。

『烈風』

一回斬るだけの抜刀術。

しかし全技中最速・最長で、優れたものは10キロメートル以上斬ることができる。日本の血統の者は、その気になれば地球を斬ることができると言われている。欠点は、直線上にあるものを全て斬ってしまうため、気を付けなければならぬ。この技に刀閃圏の展開の距離は関係ない。あまりにも速過ぎるため、目で追うことは不可能。斬られた者は斬られたことにすら気付かない。

『無限突』

自分の出せる最高の速さで相手に近づき、一瞬で数えるのが不可能なくらい突く。

喰らった相手は肉片すら残らない。剣術で唯一の近距離技。回避不可能。

e t c . . .

【日本流拳術】

日本家のほとんどはある程度習得している。メインとして使っているのはほんの一部。近距離専用。これをメインで使用しているものは身体能力がとて高い。

・技

『百目』

自分の周囲360度の全てを見ることができる。

刀閃圏はあくまで感知する技で、見えているわけではないので、正確さは刀閃圏を上回る。周囲360度の全ての光景が視覚情報として頭に入ってくるため、脳にとっても負担がかかる。慣れていないものは一分もたない。慣れた者は1時間以上使用することができる。

『韋駄天』

相手との距離を一瞬で詰める歩法。

もはや瞬間移動。優れたものは方向転換が可能。空中では使用不可、水上では可、水中でも可能だが、移動距離は短くなる。

『啄木鳥』

狙った箇所には、一瞬で何千何万もの突きを入れる。
見ているほうには、凄い速さで一回殴った様にしか見えない。狙われた箇所は確実に破壊される。欠点は至近距離でしか使えないという事。韋駄天から啄木鳥というのが基本的な使い方。

『墮天』

威力だけでなく全技中最強。全力で相手に踵落とし。使い方を次第では大陸が割れる。

『咆哮』

全力で叫ぶ。
威力は無類。ティガレックスのバインドボイスなんぞとは比べ物にならない。直に食らえば鼓膜どころか魂までお釈迦になる。欠点は周囲の者全てを巻き込んでしまうことと、単純にうるさい。

e t c . . .

【日本流堅術】

日本家のほぼ全員が習得している。

空中、地上、水中などあらゆる環境での防御を可能としている。

攻撃の全てを自分が受け止めると言う考えから作られたので、攻撃をいなすということはない。正しい手順を踏み、正しく構えることによって絶大な防御力を発揮する。その防御力は、最低でも城壁3枚分に匹敵する。

設定く日本流武術く（後書き）

今のところはこれだけですが、後々増えていきます。
主人公達の設定はもう少し後に出します。

二話

先に言っておこう。

俺は今怒っている。

どのくらい怒っているかと言うと、金が無くて発売してから約一ヶ月間貯金してようやく買ったゲームを、プレイする前に友人が重要な伏線についてネタバレしてしまったのと同じくらい怒っている。

あの時はマジで彼奴を殺すところだった……。おのれ中村ア……。ツ!!!!

おっといかん、クールダウンクールダウン……。ようやく落ち着いた。さて、落ち着いたところで、何故俺が怒っているかについて説明しよう。アレは昨日のことだった……。

（回想）

海鳴市のはずれの山にある大きな屋敷。そこには怒鳴り声が響いていた。

「流！修行をサボるんじゃない！何度言ったら分かるんだ」

怒鳴っているのは我が父、大和暁文である。

「サボっているんじゃない！俺は修行以上にやるべきことがある！それを優先しているだけだ！俺からすれば、それを阻止する父さんこそが悪である！」

「流・・・貴様ア・・・親に向かってなんて口を聞くんだ！もういい、好きにしろ！」

そう言う父さんは踵を返し、大きな足音を立てながら去っていった。

ちなみに俺の言う修行以上に優先すべきこととは、原作キャラに会いに行くことである。俺は今4歳だ。原作キャラと年齢を合わせてもらっている俺が4歳と言うことは、つまり今、主人公である高町なのはは、海鳴市の何処かの公園で一人、さみしさを感じているはずなのである。転生者たる俺は、この重要なフラグを回収しておかなければいけないわけだ。と言うわけで俺は、少し前から修行をサボって屋敷を出ては海鳴市の公園をいくつか回り、なのはを探しているわけである。

ちなみに未だ見つけれない。なのはよ、何処に……。

そしてそのためには数ある障害を乗り越えなければいけないのである。父さんはその内の一つだ。そして最大の障害はこの次だ。

おっと、早速やってきたようだ。

「流、さっき暁文が酷く憤慨していたが……何かあったのかい？」

そう、我が主、日本帝様である。どうもこの人には頭が上がらない。

「なんでもありませんよ。では俺はやることあるんで」

「ああ、今日も修行を休むのかい？なるほど、だから暁文があればど怒っていたのか。確かに流は最近休みすぎだ。日本家の一員である以上、修行は絶対である。君は確かに、我等日本の血統に近い身体能力をもっているが、それでも修行を休んで習得できるほど日本流武術は甘くない。それにも関わらず、修行を休んでまで優先することってなんだい？」

「……いくら帝様でもそれは言えませんか」

欲望のためですなんて言ったら粉にされそうだから……。

「・・・そうか、あまり深くは詮索しない。だが、暁文にあまり心配をかけるな。奴の気持ちも考えて行動するんだ」

「はいはい、分かってますよ・・・」

前世でも言われ続けた言葉だ。今更言われたってどうと言うことはない。でも嫌な気分だ。

そして俺は屋敷から出て海鳴市の様々な公園に行き、なのはを探すのだった。そして見つけれずに、無気力を味わいながら屋敷に帰るのであった。

チクシヨ・・・。

（回想終了）

こんなことがあったわけだ、何度もな！くそう・・・何処にいるんだよ・・・。まさかとは思うが、既に他の転生者がいて、そいつが連れて行ったのか！・・・ありえる・・・次は他の転生者も想定に

入れて探そう。ふふふ、絶対に彼女は渡さんぞ。

だがそのためには父さんや帝様が邪魔だ……。修行修行ってうるさいし。なのはの世界でそこまでして強くなる必要はねえよ。ようは魔力が高けりゃ大体どうにかなるんだから。それに神からもらった身体能力もある。原作に介入するにしてもこの二つがあれば問題ないよ。しかし、帝様の言葉はどうも頭に残る……。確かに父さんには悪いと思っているけど、それでも俺は『大和流』である以前に一人の転生者だ。ならばこんなことで諦めるわけにはいかない。全ては原作キャラのためだ。

さて、そろそろ行くか。今日は父さんも帝様も現れない、ツイてるぜ。

そう思い、俺は屋敷を出て散策に向かうのだった。

＊

「……………今日も行ったか」

屋敷の門から出て行く流を見て、帝は呟いた。

「一体何をしてるんだろうな。気にはなるが、僕には関係の無いことだろう。しかし、流にあ言ったが、僕自身も結構心配だ・・・流の目からは使命を帯びているような輝きの中に、欲望による濁りを感じる。堕ちてしまわねばいいが・・・。たとえ流と言えど、我等が国に仇なすようであればその時は斬らねばならない。そうならないことを願おう」

『お国のためなら親だって斬る』

自分達の座右の銘を小さく呟きながら、帝は屋敷の中に戻っていった。

二話（後書き）

まずは謝罪です。すみません。

テスト期間でした故、投稿が随分遅れてしまいました。
これからは更新速度を上げていこうと思います。

さて、次はようやく原作キャラを出せると思います。

三話（前書き）

小学生編だよ。

やっ和原作キャラが出せるよ。

三話

1年生ゝになったゝらゝ

1年生ゝになったゝらゝ

友達100人できるかなゝ

ひゃゝくにゝんで食べたいなゝ

富士山の上でおにぎりをゝ

パッくん パッくん パッくんとゝ

いつも思うんだが、この歌って矛盾あるよな。友達百人できるのはいいが、百人でおにぎり食うんだろ？ 一人何処行ったんだよ。百一人で食うなら許す、百人と食うでもOKだ。だが百人で食ったら一人、もしくは自分かはぶられてるじゃあないか。1年生の内から随分とエグい歌を歌わせるぜ。

「そうは思わないかい？　なのはちゃん」

「それはあんまりだと思うの・・・」

＊

俺こと大和流は今、私立聖祥大附属小学校にいます。

さあ、今日から小学１年生だ。人生で二度も小学１年生を味わうというのはなんとも言えぬ気分だ。だが俺がなのはと良い関係を築き、将来への布石とするための貴重なシーズンだ、抜かりは許されない。

そう、結局俺は小学生になるまで見つけれなかったのだ。故に、ここが勝負の時なのだ！

「流、ハンカチは持ったか？　ティッシュは？　お前は日本家の一員なんだ。くれぐれも、先生や他の子達に迷惑かけないようにな」

「分かってるよ、父さん」

相変わらず心配性な父だ。流石の俺もその辺のマナーは弁えてるつもりだ。

・・・・・・・・・・・・・・・・

そんなこんなで滞りなく入学式は終わった。

入学式が終わり、多くの生徒は親と別れ、各々のクラスを確認しに行っている。

さて、俺も行くか。クラス発表も重要なイベントだ。

「じゃあ父さん、俺もそろそろ行くから」

「ああ、気をつけてな。さっきも言ったが――――」

「はいはい、分かってるよ。先生や他の子達に迷惑かけるな、だろ？」

「うむ、分かっているならいいんだ。じゃあ私は行くからな」

「ああ、
バイバイ」

そして父さんは去っていった。
走って。

恐ろしく速い移動。俺でなきや見逃しちゃうね。

「全く、秘匿はどうしただよ、秘匿は」

父さんに少し呆れながら、俺はクラス発表の掲示板に向かった。

[illegible]

ふふふ、ふふふふふふ、ヤバイ・・口元がにやけるのを抑えられない。それも仕方無いことだ。なぜならば――――

「次は、高町なのはちゃん。自己紹介してね」

「高町なのはです。一年間よろしくお願いします」

そう言って高町なのはは礼儀正しく頭を下げた。

「あらゝ、丁寧ねゝ。よろしくね、なのはちゃん」

先生の間延びした声が教室に響く。そしてなのはは先生に返事を返すと、席に座った。

そう、主人公『高町なのは』と一緒にクラスになれたのである。教室をよく見るとアリサやすずかもいる。これを喜ばずしてなんとする！ 転生したことにより、彼女達は三次元で俺の目に映っている。だがそれでも素晴らしい可愛さだ。声も田村ゆかり殿の声と一緒に感動せずにはいられぬ。

「じゃあ次は大和流くん。自己紹介してね」

「ふふ、ふふふふ、ふふふふふふ」

「あの、流くん？ おゝい、流くゝん。やゝまゝとゝながゝれゝくゝん」

「ふふ、ハッ！ す、すいません。大和流です、皆さん、一年間よろしく願います」

いかんいかん、喜びのあまり注意力が散漫になっていた。しかしこの程度問題ない。少し焦ったが、丁寧に挨拶、そして俺のできる中で最高のスマイルを忘れない。前世でやろうものならクラス中からブーイングが飛びかねないが、今の俺は銀髪に黒と赤のオッドアイのイケメン。黄色い声援こそあれど、ブーイングは飛ぶまい。

クラス中の人間がサッと俺から顔を背ける。ふむ、照れているのだろう、愛いヤツらめ。

「あ、ありがとう流くん。よ、よろしくね」

「はい」

そして俺は席に座る。スタートダッシュとしては申し分ないはずだ。問題はこれからだ。どうやら俺が最後だったようで、自己紹介が終わった後は、先生が明日についての予定を伝え、解散を宣言した。

さて、行くか。

「高町さん。はじめまして、俺は大和流。よろしくね」

俺が声をかけると、なのはは驚いた顔で俺を見ている。それもそうか、いきなりイケメンが話しかけようものなら誰だって驚くのも道理。

「は、はじめましてなの。私は高町なのは、よろしくなの」

「なのはちゃんか、いい名前だね、こちらこそよろしく」

なのはは引きつった笑みを浮かべている。反応に迷っているのだろう。

とりあえずファーストコンタクトは上々。

さあ、張り切って行こうか。

＊

私は高町なのは。

今日から私立聖祥大附属小学校の1年生なの。

入学式も終わり、私の名前が書いてあったクラスに向かい、先生が来るのを待つ。そして先生が来て自己紹介をした。優しそうな先生でよかったの。

そして生徒の自己紹介が始まった。

「まずは、アリサ・バニングスちゃん。自己紹介してね」

「アリサ・バニングスよ。よろしく願いするわ」

な、なんだか気の強そうな女の子なの。

そして自己紹介は進み、ついに私の番がやってきた。

「次は、高町なのはちゃん。自己紹介してね」

「高町なのはです。一年間よろしくお願いします」

丁寧にお辞儀をすることは忘れないの。こういうのは第一印象が大事ってテレビで言ってたの。

「あらゝ、丁寧ねゝ。よろしくね、なのはちゃん」

ほめられたの。なんだか嬉しい気分なの。

そう思い私は席に座る。

「次は、月村すずかちゃん。自己紹介お願いね」

「は、はい。月村すずかです。よ、よろしく願いします」

最初のアリサちゃんって子とは正反対という感じなの。なんだか仲良くなれそうな気がするの。

そして自己紹介はさらに進み、とうとう最後になった。

あの子さっきからずっと俯いてるの。具合悪いのかな。

「じゃあ次は大和流くん。自己紹介してね」

「ふふ、ふふふふ、ふふふふふふ」

「あの、流くん？　おい、流くん。やまゝとゝなゝがゝれゝくゝん」

「ふふ、ハッ！　す、すいません。大和流です、皆さん、一年間よろしく願います」

そう言って、大和くんが微笑んだ。な、なんだか寒気がするの。とっても変わった笑顔なの。個性的というかなんというか……。

クラスの生徒全員が同じ感想を抱いたようで、皆何とも言えない表情になっていた。先生も同じなようで、引きつった笑みを浮かべながらよろしくと言い、大和くんはそれを返事を返して席に座った。その後は順調に進み、先生が明日の予定を伝えたところで解散となった。

私も帰ろうと思い、帰り支度を始める。事件はそのとき起こったの。

「高町さん。はじめまして、俺は大和流。よろしくね」

いきなり声をかけられ顔を上げると、そこにはさっきとっても変わった笑みをした大和君がいたの。と、とりあえず、挨拶をされた以上返事をしないのはマナー違反なの。

「は、はじめましてなの。私は高町なのは、よろしくなの」

「なのはちゃんか、いい名前だね、こちらこそよろしく」

そういつてまたあの奇妙な微笑みを浮かべる。直で喰らうと改めて感じるの・・・この威力を、この得たいの知れぬ恐怖を。精一杯私も微笑を返す。

なんだか不安になってきたの・・・。

三話（後書き）

見ていてイラッとした方もいるのではないのでしょうか。私もです。

私なりに精一杯ウザイキャラを考えたとつもりです。

まさか私自身にもダメージが来るとは想定外・・・

なんという諸刃ブレード・・・恐ろしや・・・

けいおんの映画を見に行ってきました。

素晴らしかったです。

あずにゃん派の私としては非常に喜ばしいものでした。

四話（前書き）

今回は全部帝視点の話です。
長めだと思えます。

四話

日本帝の朝は早い。

朝5時には起床し、道着に着替えて道場に向かい刀を何万回も振る。そしてその後、日本当主直属親衛隊の面々や親衛隊長である暁文、そして当主である御國と手合わせをし。それが終われば居間に向かい使用人によって用意されている朝食を食し、制服に着替えてから荷物の準備をする。その全てを終えりと、帝は玄関に向かい靴を履く。

「行ってきます」

「ああ、行ってこい」

御國の返事を聞くと帝は屋敷の門へと向かい、それを開く前に鞆の中身を確認する。

ポケットティッシュは持った、ハンカチも持った、教科書の忘れ物もなし、弁当も持った、刀も持った。

なにやら物騒な物が一つ紛れ込んでいるが竹刀袋の中にしっかり入れているので見かけ上問題はない。

忘れ物がないことを確認すると帝は門を開いた。屋敷の門から山の

ふもとまでは一直線の長い階段があり、多くの者はそこを通るのであろうと思われる。しかし帝は階段を使わず、その横の森へと入っていた。森の中は無数に木が生えており、足場も無造作に生えた草や木の根のせいで酷く不安定だ。普通の人では歩くことすら難しかろう。

ところがどっこい、日本帝は普通の人ではなかったのだ。

「さてと、行くか」

それを合図に帝は森の中を走り出した。

「そういえば流がまだ寝てたけど大丈夫かな。毎度毎度遅刻ギリギリで校舎に入るからな。今度は遅刻しないといいけど」

暢気に独り言を言っているが出している速さは一般人では目で追うことすら難しい速さで走っている。それでいて無数に生えている木々には一切ぶつからず、雑草や木の根に躓くこともない。

「さて、そろそろ温まってきたし、本気で行こうかな」

その瞬間森から帝の姿は消えた。しかし実際に消えたのではない。消えたと思った瞬間には帝は既に山のふもとの町を歩いていた。

『韋駄天』の連続使用、加えて方向転換。並みの使い手ではこれをやるのに10年はかかる高等技術である。そして帝はそれを荒れた森の中と言う最悪のフィールドでやってのけたのだ。そしてそれにより瞬間移動とも思える速さで山を駆け降りたのだ。

「少し……遅かったかな、まだまだ修行不足だな。精進精進」

そう言っているが、既に帝に勝る人類はこの世界にはいないだろう。現当主である御國なら分らないが彼は年を取り、少なからず衰えている。だが帝はまだ12歳で、まだまだ成長期である。10年後にはどうなっているか想像もつかない。ただ言えることは、帝が全次元世界の生物界の頂点に君臨する日は、そう遠くないということである。

鼻歌を歌いながら、帝は私立聖祥大附属小学校に向かって歩いていた。

学校の代表たる自分が遅刻するなどと言うことは許されぬ。自身の乱れは学校の風紀の乱れにもつながり、他の生徒、特に新入生に示しがつかない。

そう、彼は私立聖祥大附属小学校6年生であり、生徒会長なのである。

そしてこれは、そんな彼の優雅な朝的一幕である。

7時30分、帝は生徒会室にて書類に目を通していた。生徒会室と言っても小学生が使うものなので、簡単な椅子と長机程度の備品しか置いていない。しかし、帝が目を通してある書類の内容は小学生のレベルを超えていた。年間行事の一覧表とそれぞれの予算の上限、体育祭の競技の種目とそれに伴う材料費、文化祭での各クラスに振り分けられる費用の分配、特別イベントの考案書とその際の予想金額など小学生に任せるにはいささか早いのではないかと思わせる書類の束がそこにあった。小学生ではありえないような聡明さを発揮し、圧倒的人望で生徒会長の座をもぎ取った帝ならこの程度問題ないだろうという教師陣の判断であった。実際に帝はこの程度全く問題はない。しかし他の役員はまさしく小学生と言った感じで、帝が見ている書類の内容などサッパリである。よって生徒会の仕事のほとんどは帝が一人でこなしているのである。

76

.....

帝が教室に入ると、やはりほとんどの生徒が既に教室にいた。そして帝が教室に入るのを確認してからこちらに向かってくる少女がいた。

「おはようございます、帝様」

この娘の名前は『夏野鈴』。以前この国で秘密裏に奴隷市が開かれたときにそこを日本家が襲撃した。そこで商品としていたのがこの鈴だったようで日本家は彼女を保護した。その後調べた結果によれば、彼女は身寄りがおらず一人で彷徨っていたところを奴隷商人に捕まったということだった。そしてそれを聞いた使用人の『夏野扇』が鈴を養子として引き取ると言った。それから鈴は使用人見習いとして日本家に住んでいる。義父となった扇のもとで立派な使用人になるための修行を頑張っているのだ。

「おはよう、鈴。学校ではできればその呼び方は控えてくれないか」

「では日野様とお呼びします」

「いや、そもそも様付けをやめろと言っているんだ。いつそ呼び捨てでも構わん」

「それはできません。主君を呼び捨てなど、使用人にあるまじき無礼です」

「では主君の命に背くのは無礼でないと申すか」

「ぐっ……で、では、み、帝くんと……」

「うむ、それでよい。恥ずかしいのは分かるが、顔を赤らめるな。いらぬ誤解が立つぞ」

「わ、私は別に気にしません。……むしろその方が……」

「何か言ったかい？」

「い、いえ何も……」

「そうかい。ところで鈴、雪政はまだ来てないのかい？」

「はい、私が屋敷を出るころにはまだ修行をしてらしたので、時間的にはそろそろ来るころかと――」

そのとき凄い勢いで教室のドアが開いた。そして一人の少年が教室に飛び込んできた。

「ギリギリセーフ！ 間に合ったぜ・・・」

少年は一息つくところらに向かって歩いてきた。

「ちいーっす、帝さん。今日もお早いつすね」

「おはよう、雪政。鈴から聞いたよ、修行をしていたそうじゃないか。熱心なのはいいことだけど、こうしてギリギリに来るのは感心しないな」

「うっ・・・相変わらず手厳しいっす・・・」

彼の名前は『冬海雪政』。日本家当主直属親衛隊の一人『冬海雪崩』

の息子である。彼のような人物は日本家では珍しい。良いヤツではあるのだが少し軽薄でちょっと口が悪い、それでいて鞆や制服に何やらチャラチャラとしたアクセサリーを着けている。ぶっちゃけて言うとな彼はチャラいのだ。しかし修行のときの彼はまるで別人のようである。見かけによらず、見習いの中では一番の努力家で一番腕が立つ。その実力のおかげで、他の見習いや日本軍の人達から次期直属親衛隊所属間違いないと言われていくくらいである。彼の父である雪崩は、彼の口調や格好を目の当たりにしたときに何とか更正させようとしていたらしいが、今となってはこの性格こそが彼の強さの秘訣だと判断し見守ることにしている。

学校での彼の姿は非常に目立っていて、当初は他の生徒に不良だと勘違いされ敬遠されがちだったが、彼の人懐っこい性格や、いろんな分野の話に対応できるほどの情報を駆使し、わずか一月ほどで広まりつつあった「冬海雪政は不良」という噂を払拭し「冬海雪政は親しみやすい良いヤツ」という噂を新たに広めた。その結果、彼のコミュニティは学年全土に及び、今では彼の事を知らない人の方が珍しいと言われている。おまけに彼は日本家での修行の成果もあって頭が良い上にスポーツ万能——もちろん手加減している——だ。だからよく地元の野球やサッカーのクラブチームの試合に助っ人として呼ばれている。僕も一度彼が助っ人として出たサッカーチームの試合の応援に行ったことがある。

確か………翠屋JFCだったかな。

「ところで帝さん。今度またサッカーの助っ人に呼ばれてるんですけど、帝さんも参加してみないっすか？」

「サッカーと言うと、翠屋JFCだったか？　以前応援に行った」

「それっす。今度は応援じゃなくて選手として出てみないっすか？　前に応援に来たから知ってると思いますけど、あのチームの監督、高町士郎さんは翠屋って喫茶店の店主をやってましてね、試合に勝つと飯奢ってくれるんですよ。あの喫茶店はこの界限じゃそこそこの有名でしてね。コーヒーや料理が絶品なんすよ。特にシュークリームが最高で——」

「その辺りは知ってるよ。前に僕もご馳走になったからね。しかしなんでまた僕を誘うんだい？」

「いやあ、帝さん最近根詰めすぎてると思うんすよ。次期当主になる身なんすからもっと体を労わるべきっす。だからここは一つ、サッカーでもやってみるのはどうっすか？　ってことですよ」

「なるほどね。鈴はどう思う？」

「確かに帝様は最近碌に休んでません。普通の同年代の子達と戯れるのもたまにはいいと思います」

「ふむ、なるほどな。ところで鈴、また様付けだよ」

「し、失礼しました。み、帝くん」

「え、何？ あの鈴が帝くん？ これは珍しいものを見たぜ！ レアだ、レア！ おまけに顔を赤らめながら言うなんて破壊力抜群のオプションまで付いてくるなんて・・・扇さん、泣いて喜ぶぜ」

「なっ！ こ、これは帝様、い、いえ帝くんにそうしろと言われたからであって決して私は——」

「それなら俺と同じで帝さん、もしくは日野さんでいいじゃねえか。言わずとも分かるぜ。帝くんって呼んでみたかったんだろ？ いやあ、可愛いところがあるねえ。扇さん、あんたの娘は立派に女の子してるよ」

「・・・・・・・・殺しますよ？」

「っひ・・・・・・・・す、すいませんっした」

「二人とも、その辺にしておけ。そろそろチャイムが鳴るぞ。雪政、この件は放課後に話そう」

「了解っす」

その後すぐに授業開始のチャイムが鳴った。

[illegible]

「で、結局どうするんすか？ 帝さん」

「うーん……実はまだ迷ってるんだよね」

僕は雪政と共に帰りながら朝の件について話し合っていた。ちなみに鈴は使用人の修行がいつもより早く始まるということなので一足先に屋敷に帰った。

「なにをそんなに迷ってるんすか？ 帝さん、サッカー嫌いでしたっけ？」

「いや、そういうことじゃないんだ。ただ僕はあまりあの喫茶店に行くべきでないと思うんだ」

「なんでっすか？」

「雪政、前に僕も翠屋に行ったとき店員はどんな人だった？」

「確か、監督の高町士郎さんとその息子の……恭也、さんだったかな？ それと士郎さんの奥さんだったっす。あ、もしかして帝さん、あの人達が苦手なんすか？」

「いや、苦手なのはむしろ向こうが思ってることじゃないかな。その士郎さんと恭也さんは何かの剣術をやっている。あの歩き方、両手のマメ……二刀流……そして高町という名……不破……小太刀二刀御神流」

「なっ、それって確か、随分前にテロ組織によって滅ぼされた一族っすよね。てことはあの人たちはその生き残りっすか？ 一回しか見たことがないのによくそこまで分かりましたね」

「刀閃圈と百目で感じ取った情報と父上に聞いた話を統合して導いたものだよ。でも間違いはないと思う」

「え？ 刀閃圈展開してたんすか？ 全く気づかなかったっす」

「気づかれないようにやったからね。直属親衛隊くらいしか気づけなかったと思うよ。あの士郎って人も気づいてみたいけど」

「うわぁ、あの監督実是相当な使い手だったんすね。俺の目もまだまだ節穴っすね。でも何で向こうが帝さんを苦手って思うんすか？」

「あの人は僕の刀に気づいてた。そのせいか僕がいる間はずっとこちらを警戒してた。今言っただけ、士郎さんに関しては僕の刀閃圏も感知してた。雪政は自分の部屋に刀持ちながら結界みたいなの周囲に張ってるヤツが来たらどう思う？」

「殺そうって思います」

「・・・・・・・・・・そうだね、君はそういう奴だったね」

頼もしいというか血の氣が多いというか・・・・・・・・いい奴なんだがな・・・・・・・・。

「まぁ、普通は苦手と思うわけだ。もしかしたら僕の正体に気がついてるかもしれない」

「だとしたらまずいっすね」

「そうだろう？ だから僕はなるべく彼らに接触はしない方がいいと思うんだ」

「そうっすか……。残念っすけど仕方ないっす」

「それに最近、あの家の次女……。高町なのはだったかな……。最近流とよく一緒にいるらしい。今の流ではボロを出しかねない。だから極力学校では流にも接触しないようにしてるんだ」

「流っすか。俺、アイツ気にいらないっす。修行はサボるし、皆に迷惑はかけるし。俺、前に見ましたよ。暁文さんが泣きながら自棄酒してるの。その原因である流は、そんなこと気にも留めずに遊び呆けてやがる」

「言いすぎだよ。でも確かに流は不真面目すぎるね。でも僕は、いつかアイツは変わってくれると信じている」

「無駄っすよ。あんな奴」

最近では、よく放課後に屋敷とは反対の方にある山で何かをしてるらしい。一体何をやっているのやら。

その後、僕は雪政と他愛のない話をしながら屋敷に帰った。

四話（後書き）

執筆したのにミスって消しちゃう、なんてことが3回もあったので更新が遅れました。

次からは気をつけようと思います。

五話（前書き）

なのは見たのは随分前だから魔法について間違いがないかが怖いです。

五話

日本家の屋敷の一室。窓から差す光だけが部屋を照らしている。そこで二人の男が向かい合っていた。片方の男は胡坐をかいて話を聞いている。もう片方の男は姿勢を正し、胡坐をかいている男に話しかけていた。

「それは確かか？」

胡坐をかいている男は日本帝。この日本家の次期当主の座についている男である。

「ああ、間違いない。魔力反応があったから俺自身が出向いてこの目で見てきたんだ。どこで魔法について知ったんだか俺には分かりませんが」

姿勢を正しながら帝に話しかけていたのは、日本家当主直属親衛隊の一人、『ジョネス・バートン』。かつて時空管理局に追われていた次元犯罪者である。

「そうか、ご苦労だった。下がっていいよ」

「御意」

そう言うとジョネスの姿は部屋から消えた。それを見届け、帝は立ち上がり窓から外を見る。外には修行中の見習いの子供達と日本軍兵、そしてそれを指導している軍団長がいる。帝はそれを眺めながら顎に手を当て、先程ジョネスから聞いた話について考えていた。

「流がここから反対のにある山で魔法の練習か……。確かに流は珍しいくらい高い魔力を持っている。今まで修行をサボっていたのはそのためか？ いやしかし流がああ山に通い始めたのはつい最近。アイツは一体何を考えているんだ」

自分が弟のように見ている少年の奇行に帝は頭を抱えた。

解せぬ。

何を思っ魔法の練習なんぞしているのか。それを優先して本来するべき修行を怠る理由は。最近クラスメートの女の子に迷惑をかけているという情報もある。

考えれば考えるほどキリがなく溢れてくる疑問の数々。その全ての解答を導き出すのが面倒になって、帝は一度考えるのをやめた。

「学校に行くか」

そして荷物の準備をして、帝は学校に行った。

＊

目覚ましの音が鳴り響く。それでも布団に眠る男は目覚めない。既に時計の針は8時を示している。小学生に限らず、全ての学生が遅刻と思い慌てるような時刻になっていた。

「おい、流ー。遅刻するぞー。そろそろ起きろー」

「ん・・・・・・・・ふわ・・・・・・・・もう朝か・・・・・・・・ん？　は、8時！？　ち、遅刻でやあああああ！」

慌てて寝巻きを脱ぎ、着替える。10秒で制服に着替えると、流は居間に向かった。

「おはよう流。早く飯を食え。また遅刻してしまうぞ」

「父さん！　そう思うなら起こしてくれてもいいじゃん！」

「起こしたさ。『おい、流ー。遅刻するぞー。そろそろ起きろー』
ってな」

「やる気が感じられないよ！　ホントに起こす気あるの！？」

「黙れ！　入学式の次の日から同じ事を言って、もう二学期も終わ
るというのに貴様はいつまでたっても変わらん！　俺は目覚まし時
計じゃないんだ！　文句を言う前に自分で早く起きる努力をしろ！」

「ぐっ……それを言われては言い返せない……。あ、そうだ。
父さん、俺の鞆は？」

「それもいつも通りだよ。帝様が準備してここにおいていてくれ
たよ。もう慣れたって言ってたよ。嘆かわしい……。後でお礼言
っておけよ」

「分かってるって。じゃ、行ってきます」

「おい、飯は？」

「今日は抜いていくよ」

「おいおい、昼までもたんぞ」

「やばかったら早弁でもするさ」

「そうか、行ってらっしゃい」

ダッシュで屋敷を出て階段を何段か飛ばしながら降りる。

時刻はまだ走ればなんとかなる。

さあ、しまっていこう。

[illegible]

「で、結局間に合わなかったというわけだ」

「自業自得じゃない。いい気味よ」

「ア、アリサちゃん、言いすぎだよ。でも大和くんももっとはやく起きるべきだよ」

今は一年生の二学期がそろそろ終わるころ。すでになのははアリサとすずかのイベントを終え、友達になっているのだ。無論なのはと仲が良い俺も、アリサやすずかと仲が良いのだ。

「アリサちゃんは相変わらず手厳しいな。それとすずかちゃん、そろそろ名前で呼んでくれよ」

「え、えと、その、な、慣れなくて」

「別に呼ばなくていいわよ、すずか。あたしからすればアリサちゃんって呼ぶのやめて欲しいんだけど」

「ん？ 照れてるのかな？ 可愛いねえ。別に照れなくてもいいよ」

「照れてなんかいいわよ！ 単純にあんたに呼んで欲しくないだけよ！ 虫唾が走るわ」

ほう、ツンデレとはこういうものか。中々可愛いな。

「あそこまで言われて尚も笑ってられる大和くんもすごいね、なのはちゃん」

「にやはは……。ちょっと怖いのに……」

なのはとすずかが何やらこそこそと話している。むう、気になるじゃないか。

「おいおい、二人で何をこそこそと喋ってるんだい？ 俺も混ぜてくれよ」

「な、なんでもないよ。ねっ、なのはちゃん」

「う、うん。そうなの」

この必死な隠し方、さては俺について話していたな。アリサと仲良くしていてヤキモチでも焼いてくれたのかな。ふふふ、可愛いなあ。

「なにニヤニヤしてんのよ。気持ち悪いわね」

「そうツンツンするなよ。そろそろデレちゃいなって」

「デレないわよ！・・・・・・ああ、もう嫌・・・・」

む、アリサが酷く落ち込んでいる。どこか間違えたかな。いかんいかん、もっとフレンドリーに接していかなばな。

「大丈夫か？ 随分と顔色が悪いぞ」

「そう思うならあっち行ってよ・・・・」

「わ、分かった」

どういふことだ。予定と違うぞ。どこかでフラグを立て間違えたか？ 否、何も問題はない。とりあえずアリサからは一旦引こう。なのはとすずかのところに行くか。

「なあ、アリサちゃんが酷く落ち込んでいるんだが、俺何かしたか

な？」

「さ、さあ・・・アリサちゃん、可愛いそうに・・・」

「なにもしてないと思うよ。にやは・・・自覚がないって恐ろしいの・・・」

「「ハア・・・」」

む、なのはとすずかも落ち込んでしまった。どうやら今日は三人とも機嫌が良くないようだ。そろそろチャイムも鳴るし、席に戻るか。

「やっと思ってくれたの・・・」

「疲れるね、なのはちゃん・・・。アリサちゃんも大丈夫？」

「大丈夫じゃないわよ・・・。アイツの相手するのって辛すぎるわ・・・」

おお、どうやら三人とも立ち直ったようだ。三人で仲良く話しておるわ。俺も混ざりたいが時間的に限界だ。チクショ！。

そうして、朝の時間は過ぎていった。

.....

時刻は放課後。俺は一人で屋敷とは反対にある山に来ていた。当初の予定では彼女たち三人と下校するはずだったのだが、既に彼女たちの姿は教室になかった。近くのクラスメートに聞いたところ、そくさと三人とも帰ってしまったらしい。

俺にも声をかけてくれたらいいのに。

そんなこんなで一人で帰ることになった俺は、最近よく来ているこの山で魔法の練習をしてから帰ることにした。

家に帰ったところで 剣の修行をさせられるのがオチだし、どうせなら原作介入の際に必要な魔法を今の内に練習しておこうというわけだ。

「さて、始めるか」

意識を集中すると魔力が溢れてくるのを感じる。スフィアを生成する。4つほど生成すると、それを木に向かって放った。

木に当たったスフィアは小さく爆発した。木は少し傷ついた程度で破壊には至らなかった。

「また駄目だ。攻撃がうまくできない。デバイスがないのが問題なのかぁ……。防御魔法ならうまくできるんだが」

そう言って自身の前に防御魔法を展開する。スフィアを生成するときより遥かにスムーズである。

「うーん。単純に攻撃に向いてないのかな……。あー、なのはみたいな固定砲台って感じな戦い方がいいのになぁ……。まあいいや、とりあえず練習するか」

その後2時間ほど練習してから流は屋敷に帰った。

屋敷に着くころには既に6時を超えていて、父さんに酷く叱られた。

五話（後書き）

そろそろキャラ設定は必要か迷っています。
オリキャラも結構出したし。
もう少ししたら出そうかな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9683y/>

全ては国のため

2011年12月15日22時55分発行